

— 使徒言行録 13章・14、43-52、黙示録7章・9、14b-17、ヨハネ10章・27-30—

(そのとき、イエスは言われた。)わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。

わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。

彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。

わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、

だれも父の手から奪うことはできない。

わたしと父とは一つである。」。

—ヨハネ10章—

真の善き牧者

復活したキリストに出会ったパウロが、バルナバと共に、ユダヤ教の会堂でイエスの教えを語ったのは、救いの実体であるイエスの教えに従って、ユダヤ教に伝わる神の救いの計画を実現させるためでしたが、彼らの教えは、共同体に混乱をもたらしました。これまで何の不都合もなく従ってきた信者と、パウロが語る教えに解放感を得た人々との間に、反発と共鳴が生じたからです。

良きにつけ、悪きにつけ、組織の中に、ある種の風が入るのは、いつの時代にもあることです。

現在、私たちの教会にも、秘かに入り込んで、信者を乗っ取ろうと企んでいる新教団の存在が現れ、彼らの誘いに共鳴して被害者が出ている現実に危惧が生じています。何を求め、何を信じて、唯一の神に自分の人生を奉げようとしているのか、私たちの信仰の根幹が問われる事態です。

牧者を求める無力な羊たちに、主イエスは「私の羊は、私の声を聞き分ける。私は彼らを知っており、彼らは私に従う」と呼びかけます。

狼は、あらゆる手口で迷える羊を拉致しようとしませんが、真の牧者は羊を養い、拉致された羊を、自身の命に代えて取り戻す「救い主」です。規則や慣習、制度に安住するのではなく、私利私欲のない真の牧者の生き方に神の心を見、神に従っていく信仰が求められているのです。



ご利益を求めてカトリックから新興宗教に転会した、私の母の友人が、母にも転会を迫ったとき、母は、「信じた宗教を全うできないでいる私が、今から他の宗教をどうして全うできるでしょう。私のやるべきは今、自分の宗教を全うすることです」と答えて断っている姿に感動を覚えた私です。

また、経営していた会社をたんで教会の執事として仕えるようになったある先輩は「子分のために死んでくれる親分なら信用できると思った」が、彼の受洗動機でした。

真の牧者の確かな証しは、私利私欲なく、羊のために命を捨てる牧者であり、ご利益をちらつかせる詐欺師ではないのです。

2022年5月8日 主任司祭 昌川 信雄